

「からころも（韓衣・唐衣）」考

歌語の実態と消長

A Study about *karakoromo*

The actual situation and history of the poetic word

片岡智子*

Karakoromo has been used as a poetic word since the Manyo period. Since the Heian period the word has lost most of its original meaning and has come to be used more as a decorative expression for introducing words associated with clothing.

However, I wonder if that is really the case. In the collection of poems in poem 952, volume 6, of the *Manyoshu*, the *Kara* of *Karakoromo* is not the Chinese *Kara*, but the Korean *Kara*. The *Kara* in the *Manyoshu* usually means the Korean peninsula. When you examine the six poems carefully, you see that the poems are, in fact, about *Karakoromo*. Consequently, the truth comes to light. That is, that the *Karakoromo* was a kind of an overcoat that was sewn in autumn, that it was about 7/10 in length and that it was normally worn inside-out in the front. It came from the *Kofuku* which was worn by the northern barbarians

*KATAOKA Tomoko ノートルダム清心女子大学助教授。岡山大学大学院修了。論文に「ゆるし色考－源氏物語『ゆるし色』考の一環として－」「源氏物語における服飾表現の時代性－『このゆゑつきたる御装束』をめぐっての一考察－」「いまや色考－源氏物語『ゆるし色』との関連において－」などがある。

the period before.

Secondly, *Karakoromo* in the *Kokinshu* is also not merely associated with *clothing*. Here it is a poetic word based upon the actual *Karakoromo*. From this we know that the word was used as live rhetoric. Then, from the *Kokinshu* era the word *Kara* was used to mean China instead of Korea and took on a Chinese image. Furthermore, it seems, as is evident from the expression 'tamotoyutakani' (No. 805), that it had come to mean wide-sleeves and not tight-sleeves.

Therefore, from this we see that the word *Karakoromo*, which until now was thought to have been either the *Kara* dress from China or to have been used without actually knowing its true meaning, is in fact, used in its true meaning within poetry. It is used as live rhetoric. Consequently, it is now possible to clearly interpret those expressions which have till now been unclear on the basis of this.

はじめに

従来より「からころも」は、実態が不明で万葉時代から歌語になり切っており、平安時代に入ってから、唐の衣服かといわれ、「衣」に縁ある表現を導き出す働きをする枕詞として捉えられている。

確かに「からころも」の用例は、すべて歌語である。特に『古今集』以後は、枕詞となり、序詞を形成し、縁語や掛詞を導き出す修辭的表現として用いられている。しかし、『万葉集』における「からころも」の歌を詳細に分析すると、「からころも」なるものを実に具体的に詠み込んでおり、その実態が浮かび上がってくる。また、時代性を検討すると、「からころも」の「から」は「唐」

ではなく、「韓」であることも判明する。その歴史性と、実態から一時代前の北方胡服系の外来服だったことが明らかとなるのである。

さらに『古今集』以後における「からころも」も、基本的に『万葉集』の「からころも」を踏襲し、それらの表現からも「からころも」の実際がより明確となり、服飾史上の時代的変遷をも読み取ることができる。一方でその実際から「からころも」が、単なる「衣」に縁ある表現を導き出す歌語ではなく、「からころも」そのものに縁ある表現が導き出される歌語であることも判明する。

本稿においては、時代や歌風の変化の中に、実物が適切に把握された上で一首に詠み込まれていることを明らかにし、「からころも」なるものの実態を究明して行く。そして、生きたレトリックのキー・ワードとなっている歌語としての「からころも」の表現性も探って行きたいと思う。

—

「からころも」の考察に入る前に、従来からの「からころも」に関する諸説を管見に入った限りではあるが、整理してみよう^①。

古辞書においては、『倭名類聚抄』に「背子」の項目に、「和名 加良岐沼」とあり、平安朝の「からきぬ」は掲載するが、「からころも」は見あたらない。したがって、「からころも」は、『万葉集』に初出することからも、「からきぬ」より古い時代のも物といえそうである。後に『日葡辞書』に「カラコロモ（唐衣）」は登場するが、そこでは、「シナの衣服」とし、中国の衣服一般を指す語彙となっている。江戸時代の『雅言集覧』には「からころも 韓衣」として、歌の用例のみを列挙し、意味説明は試みていない。「からころも」は歌語と解され、それに基いて「韓衣」の用字法を採用したのであろう。

明治に入り『大言海』において「からころも」は、実物と枕詞の二項目に分けて説明してある。この方式は、後の辞書の学ぶところとなる。用字は、「韓衣」とし、語源として「韓国ノ制ニ倣ヒテ製セシ衣ナラムカ」としながらも、

「袖、大キク裾ハ^{クルブシ}踝ニ至リ、上前、下前、深ク打ち交ヘテ着ル今ノ常ノ衣ノ製ナルヘシ。」といい、「我が邦、上古ノ衣ハ、筒袖ニテ、裾ハ、膝マデニ至ラザリキ」と述べ、上代の胡服系の衣服と区別して、唐風に仕立てた著物としている。この説は、唐風の衣の意として『大日本国語辞典』『大辞典』『万葉辞典』『大日本百科事典』『日本服飾史辞典』などが同じくし、実物の説明として、『源氏物語事典』『平安朝服飾百科辞典』『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』が踏襲する。それに伴って、『万葉辞典』を除いて、先の辞書類では、用字も「唐」をあてて「唐衣」としている。なお、『大日本国語辞典』においては、枕詞の方は、「韓衣」とし、『大辞典』『角川古語大辞典』では、「唐衣 韓衣」と両方提示している。

「からころも」を珍しい美服とする説は後でも述べるように、歌の注釈の中から生じてきたものらしいが、辞書においては、山田美妙編『日本大辞典』が最初である。ここでは、「(一) 韓の衣 (二) 珍しい衣」とし、この(二)の意味は、『大日本国語辞典』『大辞典』『万葉事典』『平安朝服飾百科辞典』などで唐風の衣の説明の後に付け加えられている。

『古事類苑』においては、「韓衣」とし、『万葉集』巻11・2690番歌を例示し、『万葉集略解』の説を掲載する。それによると、「辛は借にて韓也」といい、巻14・3501番歌の上句の表現から「古へ韓人の衣の裔あはざりけん、後世衣をすべてから衣といふとは異也云々」と引用している。「からころも」を、裾が合わないという特徴を持つ昔の韓人の衣服と特定したのが、『万葉集略解』の説である。その説を良しとしたのであろう。次に『寛平御遺誡』の「弘仁御時、諸堂殿門額初書、宮城東面、帝親書耳、又初製唐服云々」を引くのは、韓人の衣服である「からころも(韓衣)」は、弘仁以前のものであることを示唆したものであろうか。

『時代別国語大辞典 上代編』では、「韓衣」としながらも、外国風の着物とし、裾に特徴があったことから、いわゆる有襷衣を意味したものかといい、「また、平安時代にカラギヌと称した^{はいし}背子であるとする説もあるが、これは女

子が衣の上に着るもので、男子は着ない」と考証し、平安朝の「からぎぬ」と区別して、「からころも」が男子も着用するものであることを示している。『岩波古語辞典』では「韓衣 唐衣」と併記して、同じく外国風の着物とする。続いて、珍しく美しい衣服と説明する。

『国史大辞典』においては、「外来服であり、唐様か韓様が問題であるが」と述べるが、『日本書紀』の天武天皇十三年（684）四月の詔の内容から「唐様の有襴の表衣の使用を伝えているので、この種の胡服系の盤領の縫腋のこのようである。」と、時代と實際を考証している。ここでの「胡服系」とは、一時代前の北方胡服のことではなく、唐朝において流行した胡服を指すもののようで、したがって、「からころも」の實際を長衣の襴付の表着と述べるのである。先の『時代別国語大辞典』とともに唐風の衣服説をとる。

一方、枕詞とする項目の方も、『大言海』以来、「着る、裁つ、反す、紐、裾ナドノ枕詞」と解するのが普通であるが、大正八年出版の『大日本国語辞典』において「すべての衣の事にかけていふ」とあるように、「からころも」そのものではなく、衣に関わる縁ある言葉を導き出す枕詞と解されることになる。この説は、『源氏物語事典』『大日本百科事典』『平安朝服飾百科辞典』『角川古語大辞典』が明記し、枕詞の項目しか掲げない『日本古語大辞典』も衣の縁語とし、さらに、『枕詞辞典』『歌枕歌ことば辞典』においても衣に関わる多くの言葉を導き出す枕詞と解している。これは、『顕註密勘』以来、『古今集』の歌の注釈史の中から生じてきたものと考えられる。

なお、『万葉集』の注釈の歴史において「からころも」に言及したのは、『万葉考』が古く、「から国より漢機呉機織アヤハトリクレハトリを召て、から様の衣をば皆から衣といふなり」とあり、唐風の衣服としている。『万葉集略解』は、先に『古事類苑』のところで述べたが、韓人の衣とし、『万葉集古義』もそれを踏襲する。『略解』においては、『古義』も引用するように、「からころも」を「あやある衣」と注釈しているが、後世、「からころも」を珍しく美しい衣服とする説は、ここを発端とするものであろう。近代の『万葉集』の注釈においては^②、用字

は「韓衣」とするものの、ほとんどが唐風の衣服とし、講談社文庫の『万葉集』が、「韓」は韓も唐もいうとし、渡来人の着た服としている。韓人の衣服と特定する説は近代になるとみられない。

一方、『古今集』の注釈史においては、先にも述べたように、『顕註密勘』に「ころもと云文字をとらんとて唐衣とをけり」（『古今集』697）、『古今私秘叢』に「衣ノ縁ニ依ヲ返タスト云リ」とあるように、すでに古注において、衣に縁ある表現を導き出す歌語として理解されていたことがわかる。新注でも枕詞として捉えている。近代になると、ほとんどが、衣に関わる言葉を導き出す枕詞と解され、唐風の衣服説をとるが^③、中でも金子元臣の『古今和歌集評釈』で、「唐は韓又は支那の意に用ひ、又美称として用いる」とあるように、「から」を美称とする説が登場する。窪田空穂の『古今和歌集評釈』や『新釈古今和歌集』、新日本古典文学大系の『古今集』などが、美称説をとっている。「からころも」を、単に衣に関わる枕詞と捉えるだけでなく、珍しく美しい外来の服という原義を反映させて美称としたものであろうか。

なお、服飾史上から「からころも」に言及したものは、『歴世服飾考』と『上代衣服考』でそれらについては、石村貞吉氏の「韓衣考」においても^④論じられている。「からころも」がすべて歌語であったことから、服飾史で論じられることが少なかったのであろう。『歴世服飾考』は、唐風の衣服としながらも純然たる唐服とは異なるものとし、『上代衣服考』もほぼ同じ説である。また、藤原貞幹の『衝口発』における韓衣説を紹介している。貞幹の説は、応神天皇以降に行われた韓衣は、一般に上古からあった衣褌の制で奈良時代の庶民の服は、この韓衣であるというもので、石村氏も言うように、それが「からころも」と明言はしていないものの、韓様の民間服であったことを暗示する説として注目に値する。当の石村氏は、諸説の考察の後、いわゆる一時代前の衣褌の制でもなく、唐服より変化した朝服でもない。一種の民間に行われた服装として結論付けている。

この後、佐々木幸綱氏が「万葉集東歌論の一章——高麗錦」と『から衣——』

の中で^⑤、東国のイメージが反映していることから、上流階級の着た中国風の服ではなかったのではないかと言ひ、高句麗風の服のことでなかったかと述べる。先にあげた『歌枕歌ことば辞典』においても、『万葉集』巻六に「韓衣」とあることから、朝鮮半島から入った衣かと言うが、実体は不明としている。

以上のように、先行研究による「からころも」は、実物と枕詞に分けられ、実物の場合は、韓様か唐様かで説が別れ、それによって実態の把握が異なってくる。しかも大方が、唐風の衣服説をとっている。枕詞の場合は、『万葉集』においては、漠然とではあるが、「からころも」に関わる表現を導き出す枕詞と解されているようであるが、『古今集』においては、「ころも」に縁ある言葉を導き出す歌語と見做され、まったく技巧的表現の鍵になる修辭的歌語と捉えられている。「から」が美称ととられることはあっても意味のないものとする説がすべてであった。このように「からころも」の実態も不明で、すでに歌語としてしか残っていない、あまりにも技巧的歌語として捉えられた結果、歌の中に詠み込まれている「からころも」の実態を看過してしまったものであろう。なお「からころも」の実態の究明は、翻って、和歌における枕詞の表現性理解の一端に反省を促すことになるのかもしれない。

二

『万葉集』における「からころも」は六例（異伝歌を入れると七例となる）があるが、それらの歌の表現から「からころも」の実態を探るとともに、一首の解釈も試みてみよう。

① カラコロモ 韓衣 キナラノサトノ 服櫓乃里之 シママツニ 嶋待尔 タマコ 玉乎師付牟 シツケム 好人欲得 ヨキヒトモ 欲得 ガナ （卷第6 雑歌⁹⁵⁷₉₅₂）^⑥

この歌は、全体が歌意不明の歌とされている。しかし、「からころも」の実態を考慮すると一首の意味が明らかになる。通説では、「からころもき」までが奈良の序となっているととるが、「からころも」は、後の『古今集』410番歌や『後撰集』の⁵²⁹₅₃₀、⁶⁶⁰₆₆₁番歌にみられるように「き」は、着ると来るの掛詞ともなっており、次の「なら」は、着馴らすと来慣れる。つまり通い慣れる奈

良の里の意を掛けたものと考えられる。着馴れるとは、先の『古今集』の410番歌において「から衣きつつなれにし」にみられるように衣が萎える意の「萎え」の縁語になっていることから、着馴れると何らかの変化が生じるような特徴を持つ衣服だったとはいえないだろうか。

なお、三句目の「嶋」に関しては、佐竹昭広氏が「^{ツマ}嬌」の誤りではないかと考察し^⑦先の業平歌(410)をあげて、「から衣」「着なる」「つま」という三つの^{つけあわ}附合せは、この万葉歌が先駆をなすものであらうと述べるが、それらが「からころも」から導き出される縁語や掛詞として捉えると妥当となる。万葉歌においては、妻の意味だけで、衣の袂は意識されていないようであり、待つのも文字通り妻が待っているという意に解される。この歌から着想を得て、実際の「からころも」に「袂」に特徴があるところから、縁語とし、掛詞にしたのは、業平の創意だったのではなかろうか。いずれにしても、一首の意味は、韓衣を着馴れて通い慣れる奈良の里に愛しい妻が待っている、そんな人を玉で飾るであらう、そんな佳き人がいてほしいものよと通釈できる。『万葉集』には「^{ヒト}恋^{ビロモキ}衣^{ナラ}着^ノ櫓^{ヤマ}乃山」(巻12・3088)と同様な表現もあり、まさに「からころも」が男性が妻のところに通って行く時に着用する恋衣ではなかったかと考えられるのである。題詞から神亀五年(728)の歌である。

次の二首からは、「からころも」は、秋のものであり、しかも女性によって裁縫されたものであらうことが判明する。

② ^{カリガネノ}鴈鳴乃 ^{キナキシトモニ}来鳴之共 ^{カラコロモ}韓衣 ^{タツタノヤマハ}裁田之山者 ^{モミダソメタリ}黄始有 (巻10秋雑歌²¹⁹⁸₂₁₉₄)

③ ^{カラコロモ}辛衣 ^{キミニウチキセ}君尔内著 ^{ミマクホリ(ミマクホシ)}欲見 ^{コレゾ}恋其 ^{クラシ}晩師之 ^シ雨零 ^{アメノフル}日乎 (巻11寄物陳恩²⁶⁹⁰₂₆₈₂)

②における「からころも」は、大方の注釈書が、韓衣を「^た裁つ」の同音で龍田山の「たつ」のみを導き出す枕詞ととるが、上句がすべて龍田山にかかる表現で、講談社文庫本にいう「雁が来て鳴くと共に韓衣を裁つ、その龍田の山は黄葉しはじめたことだ。」と解するのが妥当であらう。衣を裁つのは、韓衣だけに限らないが、「からころも」は秋に裁縫されるものという季節感が濃厚に反

映される代表的な衣服だったと考えられる。したがってこの一首から雁がやって来て鳴き声を聞くと同時に裁って冬支度をする往時の生活習慣を窺い知ることができる。そして、この上句は万葉人らしい生活感覚に根差した季節感を表わす序詞と捉え得るのである。ここから「からころも」が、季節でいうと秋に裁縫される裕の冬衣ではなかったかと推察される。事実、後の勅撰集における「からころも」の用例も、季節的には秋部にしか登場せず、特に『新古今集』所収で、『栄華物語』うたがひの巻に出る次の歌と詞書からも「からころも」が冬衣であったことが明らかである。出家した道長が、四月一日に娘の上東門院に、衣替えの装束を贈って、

から衣はなのたもとにぬぎかへよ我こそ春の色はたちつれ（『新古今集』

1483
1481）

冬衣を美しい春の衣に着更えなさい。私はこの世の美しい色香は思ひ立ちましたのが意味である。「からころも」は、「はなのたもと」つまり、春の衣と対比されて、衣更えの歌として詠まれており、返歌でも「から衣たちかはりぬる春のよに」とある。冬の衣料であったことは明白である。少なくともその事実は、平安中期までは知られ、『新古今集』あたりでも理解されていたものと思われる。

③は、「からころも」が女性の縫いものであったことを示している。この歌から作者自身が縫ったものであったろうことは、日本古典全書本、『万葉集全評釈』、講談社文庫本なども述べている。「からころも」は、先の歌からも判明したように秋に裁縫される冬の衣服であるから、この一首から、愛しい人の為に「からころも」を縫い上げ、早く着せてみたいものと、その出来上った「からころも」を見ながら、その人がやって来るのを心待ちにして秋雨の一日を過す万葉の良き妻の姿が、実に鮮やかに浮び上ってくる。やがてその衣を着て男性は、恋の夜道を通して来ることになるのであろうか。先の①の歌とともに、男性の着用になる恋衣となるものであったことを表わすものであろう。

次の三首からは「からころも」の形態上の特徴を知ることができる。

④朝影^{アサカゲニ} 吾身^{ワガミ}者^{ハナリメ}成^{カラ} 辛衣^{コロモ} 欄^{スソノ}之^{アハズテ}不相^{ヒサシクナレバ}而²⁶²⁶ 久成²⁶¹⁹者²⁶²⁶ (卷11寄物陳思²⁶¹⁹)

⑤可良^{カラ}許^{コロモ}呂^{スソノ}毛^{ウチカヘ} 須蘇^{アハネドモ}乃^{ケシキ}字^コ知^{コロヲ}可^{アガモ}倍^{ハナ} 安波^{タニ}祢³⁵⁰¹杼³⁴⁸²毛³⁵⁰¹ 家思³⁴⁸²吉³⁵⁰¹己³⁴⁸²許³⁵⁰¹呂³⁴⁸²乎³⁵⁰¹ 安我³⁵⁰¹毛³⁴⁸²波³⁵⁰¹奈³⁴⁸²

久^{タニ}尔³⁵⁰¹ (卷1 4 相聞³⁵⁰¹
3482)

⑤可良^{カラ}己^{スソノ}呂^{ウチカヘ}母^{アハナヘバ} 須素^{ネナヘノ}能^{カラニ}字^{コト}知^タ可^{カリ}比^{ツモ} 阿波^{ツモ}奈^{ツモ}敝^{ツモ}婆^{ツモ} 祢^{ツモ}奈^{ツモ}敝^{ツモ}乃^{ツモ}可^{ツモ}良^{ツモ}尔^{ツモ} 許^{ツモ}等^{ツモ}多^{ツモ}可^{ツモ}利^{ツモ}

④は「欄^{スソノ}之^{アハズテ}不相^{ヒサシクナレバ}而²⁶²⁶」とあるように、「からころも」が裾が合わない衣服であったことを示しており、韓衣の裾が合わないように久しく逢わないので意となっている。この歌の裾が「欄」^{スソノ}とあることから、先にも述べた有欄衣かとする説も出たが、『万葉集』における「欄^{スソノ}」は、他の四例も、文字通り衣の裾の意味で用いられている。この歌一首が例外とは考えられない。この歌においても着物の裾の意味であろう。その裾が合わないとは、前身頃の左右が合わない状態を表現していることとなる。次の⑤の「須蘇^{スソノ}乃^{ウチカヘ}字^{アハネドモ}知^{ケシキ}可^コ倍^{アガモ} 安波^{タニ}祢³⁵⁰¹杼³⁴⁸²毛³⁵⁰¹」によって、さらに具体的に捉えることができる。「うちかへ」は「打ち交^カへ」で、交すの意味で、着物で打ち交す部分は、前身頃の上前と下前である。それが合わないとは、上前と下前になるべき前身頃が左と右に返され、前開きの形になっていたということなのではなかろうか。このように考えると、後の「からころも」が用例に「かへす」を導き出し、「返す」と「帰す」の掛詞ともなって詠み込まれるのは、「からころも」そのものの形態上の特徴から導入された縁語だといえよう。⑤は、⑤の異伝歌だが、ここでも「須素^{スソノ}乃^{ウチカヘ}字^{アハネドモ}知^{ケシキ}可^コ比^{アハナヘバ}阿波^{タニ}奈³⁵⁰¹敝³⁴⁸²婆³⁵⁰¹」とあり、前身頃の裾が合わないことが逢えないことの喩えになっている。衣の前身頃が合わないのは、左右にうち返されているからだだとすると衣の裾がうち返されて表に直に出てくることとなる。なぜ業平が「からころも」の縁語として衣の「裾^{ツモ}」を導き出したかも納得できるところとなろう。

六首目は、防人の歌で、すべての注釈にいうように、まさしく实景を詠んだものである。

⑥可良^{カラ}己^{スソノ}呂^{ニト}茂^{リツキ} 須曾^{ナク}尔^コ等^{ラヲ}里^{オキ}都^テ伎^ゾ 奈^キ苦^ニ古^キ良^ニ乎^ヤ 意^オ伎^モ旦^{ナシ}曾^ニ假^シ奴^シ也^シ 意^オ母^モ奈^{ナシ}之^シ

尔^{ニシテ}志^{シテ}旦⁴⁴²⁵ (卷2 0 4401)

この歌の「須^ス曾^ソ尔^ニ等^ト里^リ都^ツ伎^キ」とあるところから、「からころも」が、一番上に着用された上着で、しかもその裾に幼な子を取りつき易い長さであったろうと推察される。幼な子を取りつくのであるから、七分丈程度だったのではなからうか。防人は、これから旅に出るところであり、この歌から「からころも」は旅の衣であったらしいことも判明する。「からころも」が旅の衣であったということは、この後『古今集』において、375番歌は、離別歌、410番歌は羈旅歌であり、『後撰集』においても、旅立ちに際しての贈答歌二組¹³¹⁶₁₃₁₇と¹³¹⁷₁₃₁₈、¹³²⁸₁₃₂₉と¹³²⁹₁₃₃₀は、離別羈旅の部に入れられ、『拾遺集』においては、三首(321・326・327)が別の部の歌である。特に『拾遺集』の326番歌では、「旅人の露はらふべきから衣」と表現してあり、旅衣だったことは明白である。

以上のように、『万葉集』における「からころも」は、女性によって秋に裁縫され、男性によって着用される冬の衣であり、時に恋の道行の夜の衣となり、旅の衣ともなるものであったらしいことが判明する。形は、前身頃の上前と下前は重ならず、左右に開かれ、一番上に着る上着で、その裾に幼児が取りつき易い長さであった。したがって、形態上からも、長衣で上前と下前が深く打ち交えて着る唐風の衣服ではあり得ず、特定の用途を持つ独特の衣服だったことがわかる。なお、衣の丈が、七分丈程度だったらしいことは、次節において、その時代性を確め、服飾史上の事実と照応することによって、より明らかになってくる。これらの「からころも」は、枕詞や序詞を形成し、縁語や掛詞を導き、寄物陳思歌における比喻表現にと、表現上も十分にこなされて用いられており、すでに平城万葉の頃に歌語になり切っているといえよう。しかも、「からころも」なるものの実際の特性を踏まえた上での表現技法となっている。衣服としても、ささやかな万葉の妻や防人、東歌に詠み込まれ、万葉人の生活に根ざした、特徴のある服装として定着していたことが窺われるのである。

三

次に「からころも」の「から」は、『万葉集』の用字法だと先の②の歌に

「韓衣」とあり、「唐衣」はみられない。しかし、当時の「韓^{から}」が、朝鮮半島を表わすとともに、転じて外国の意となり、やがて唐をも指すようになっていたことから、朝鮮半島の「韓^{から}」なのか、中国の「唐^{から}」なのか判じ難いところが生じるのである。けれど、『万葉集』における「からくに」が示す意味と時代性から、古き「から」は、「韓」であつたろうことが明らかとなってくる。

『万葉集』における「からくに」の用例は七例みられる。その①巻5雑歌⁸¹⁷₈₁₃「可^{カラ}良^ラ久^ク尔^ニ」は、題詞と歌の内容から、神功皇后が新羅へ出兵した故事を詠った長歌の一句で、新羅のことであり、巻15は、天平八年（736）の遣新羅使の歌群を収める巻であり、②巻15³⁶⁴⁹₃₆₂₇「可^{カラ}良^ラ久^ク尔^ニ 和多^{ワタ}里^リ由^ユ加^カ武^ム等^ト」は、新羅を指すものと考えられる。同じく巻15の③³⁷¹⁰₃₆₈₈「須^ス売^ル呂^ロ伎^キ能^ノ 等^ト保^ホ能^ノ 朝^{ミカド}庭^ト等^ニ 可^{カラ}良^ラ国^{クニ}尔^ニ」と表現してあるように遠方の天皇の朝廷とは、新羅のことであり、遣新羅使の長歌となっている。同じく巻15の④³⁷¹⁷₃₆₉₅「牟^ム可^カ之^シ欲^ヨ里^リ 伊^イ比^ヒ都^ツ流^ル許^{コト}等^ノ乃^ノ 可^{カラ}良^ラ久^ク尔^ニ能^ノ」は次の歌とともに前の長歌の反歌であり、次の³⁷¹⁸₃₆₉₆で「新^シ羅^ラ奇^キ敝^ヘ可^カ 伊^イ敝^ヘ尔^ニ可^カ加^カ反^ハ流^ル」とも詠んでいることから、④の「からくに」も新羅であつたことがわかる。⑤巻16有^ユ由^ユ縁^{エン}并^ヒ雑^{サツ}歌^カ³⁹⁰⁷₃₈₈₅では、「韓^{カラクニ}国^ノ乃^ト 虎^{トラ}云^{イフ}神^{カミ}乎^ヲ」と虎にかかる枕詞として用いられていることから、ここでも朝鮮半島の「韓^{から}」を意味するものといえよう。巻19における⑥⁴²⁶⁴₄₂₄₀「韓^{カラクニ}国^ニ辺^ヘ遣^{ヤル}」は、光明皇后作で、天平勝宝四年（752）の遣唐使の出発に際しての歌で、この「からくに」は、唐を指したものにとれる。同じく巻19の⑦⁴²⁸⁶₄₂₆₂の「韓^{カラクニ}国^ニ 由^ユ伎^キ多^タ良^ラ波^ハ之^シ氏^テ」も遣唐副使への餞の歌で、唐である。このようにしてみると、後期万葉以前の「から」は朝鮮半島の「韓」を意味すると考えていいであろう。したがって、神亀年間にはすでに定着していたと思われる「からころも」の「から」も「唐衣」でなく「韓衣」であり、唐風でなく、朝鮮半島系の衣服を意味する韓風の衣ということになる。それは、平城万葉の時代においても、一時代前の古風な時代性を表わすものであり、古墳時代の胡風上下衣を示すものとなるのである。

そこで、一時代前の北方胡服系の服装の歴史を視覚的資料によって探ってみ

たいと思う。我国の服飾史においては、奈良朝の唐風上下衣時代以前が、古墳時代の胡風上下衣時代とするのが通説であるが、周知のように、それは、高句麗壁画古墳に描かれた服装と酷似するからである。

図①は^⑧、高句麗の双楹塚古墳の壁画（4～5世紀）の男装で、前身頃^{（じま）}の左右は深く合わされず、丈の短い表着で、図②は、同じ壁画の女装の「襦」で、やはり前身頃が深く重ならず、丈も七分丈の表着であることに着目したい。それに対して、図③は我国古墳時代（4～6世紀）の埴輪に見られる男装で、盤領ではあるが、前身頃は深く合わされず、筒袖で短衣の表着である。図⑥は、同じく古墳時代の女装で、表着は同じ筒袖で前身頃は深く重ならず、やはり七部丈である。前身頃が深く合わず、左衽で筒袖、そして短衣という北方胡服の特徴を如実に表わしている。むしろ双楹塚古墳壁画の方が、袖も身頃も少し寛衣化し、漢化の傾向がみられ、我国の八世紀初頭の図⑤と⑥の高松塚壁画古墳の方に近いことがわかる。女装の方がより胡風であるが、高松塚古墳壁画の服装も基本的には、いまだ胡風で短衣である。しかし、襦が付いており長紐を腰で結んでいる。これは、先に『国史大辞典』にも引用した『日本書紀』の天武天皇十三年（684）の詔「男女並衣服者、有襦、無襦、及結紐、長紐、任意服之 其会集六日 著襦衣而著長紐」の会集の日の服装と一致する。襦衣で長紐を付けることは、天武朝の新風だったかと思われる。また先の襦があるから唐風の長衣とする説は、たとえ襦が付いていたとしても短衣と矛盾するものでないことも示している。そして、あいかわらず結び紐が胸元にみられるが、これは、古墳時代の図③と④にあるように、我国古墳時代の服装の特徴である。天武朝の詔に述べるように、やがて衣と紐が分離され、紐は、「長紐」として単独のものとなるので、衣に紐が付いた状態は、我国の胡風上下衣時代の古風が残存したものといえるのである。

このように、北方胡服系の服装となると、七分丈程度の短衣となる。先に『万葉集』⑥の防人の歌の表現から、幼な子^{（こ）}が取りつき易い長さであったろうと推定したが、「からころも」が、胡服系の衣服であれば、図①②③④から明

らかなように、七～八分丈の短衣であつたろうことが確認できよう。

また、前身頃の左右が深く重ならない胡風の表着だと、先の『万葉集』④⑤⑤の表現にあつたような「うち交ひ」が合わない状態が前身頃を左右にうち返せば、前開きの形態となり、可能となる。前身頃が開かれた状態は唐に大流行した胡服の開襟の着用法に通じるものがある。図⑦は、陝西乾县季賢墓の壁画で、盤領を解襟した胡服である。唐で流行した胡服に関しては、すでに原田淑氏がペルシャ系の胡服であろうと述べているが、^⑩ 図①ともよく似ている。本稿においては詳しくは論じないが、北方胡服とペルシャ系胡服とは、元々源を一にするものと考えられる。図⑧の永泰公主墳墓の壁画の唐代の女装で、先の男装より唐風となっているが、開襟の胡服である。特に図⑦の男装の開襟を襟のみでなく、前身頃全体に及ぼすと、衣のうち交いが合わない状態が生じる。まして、先に述べた前身頃が深く重ならない北方胡風の衣であれば、左右にうち返される事によって、前身頃がまったく合わない形態となり、先の『万葉集』の④⑤⑤の衣のうち交えが合わないとする表現から解明できる「からころも」の実際と一致することになるのである。

以上のように、服飾の歴史に照らしてみても、「からころも」が、北方胡服系の、つまり韓風の衣であり、その中の有用性のあるもののみが、次の時代にも残ったのであろう。その特定できる「からころも」とは、胡服の中でも、前身頃の左右が合わないという形態上の特徴を持ち、袷の衣で道行きの衣、旅の衣となる外套の様な衣服だったのである。

图
①



图
②



图
③



图
④



图
⑤



图
⑥



图
7



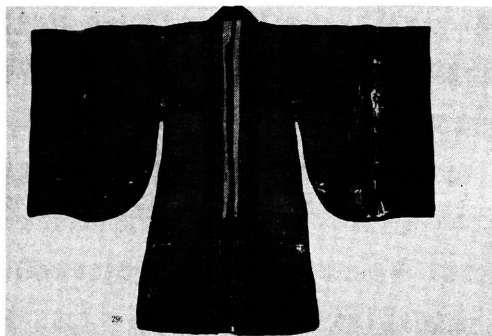
图
8



图
9



图
10



四

『古今集』における「からころも」は、十例ある。『古今集』になると、従来から慣用的に「唐衣」と書くが、主な写本をみても^⑨「唐」と書くのは、流布本の五例（375・410・697・786・865）と卷子本に一例（410）、大江切に一例（697）、元永本に一例（697）にみられるのみで、他はすべて仮名書きである。大江切と元永本は、貫之の697番歌で、この歌は、「しきしまややまとにあらぬ唐衣」と大和と「から」を対比させており、そこを強調し、その時代の「から」と捉えると唐ということになろうが、「韓」が元来漠然と外国を意味する言葉であるから、漢字をあてはめるとすると、やはり「韓」とすべきであろう。しかし、歌語である。歌語としては、原義は「韓」としても、「からころも」と仮名書きをするのが適切であろうと考えられる。本稿においても、すべて「からころも」とする由縁である。

『古今集』においても、『万葉集』の「からころも」をよく踏襲し、さらに技巧的に使いこなされている。

①からころもたつ日はきかじあさつゆのおきてしゆけばけぬべきものを（375）

②からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ
（410）

先にも述べたが、①は離別歌、②は羈旅歌で、その表現からも、「からころも」が旅の衣であったことが明らかである。①の「たつ」は衣の裁つと出立の発つ、「おき」は、起きと置きの掛詞で、旅衣である「からころも」から導き出され、旅に出発する夫を見送る妻の朝の別れの状況と気分を十分に表わしている。②は有名な業平の歌で、これほど「からころも」という歌語を生かし切った歌もなからうかと思える。ここでも「からころも」は旅装であり、しかも妻が縫ってくれたもの、「きつつ」は、着ると来る、「なれ」は、萎れると馴れる。これは、先の『万葉集』①の「きなら」にもみられたが、「からころも」が、最初、強々しており、着ていると次第に萎えてくるものであることを表わしている。それは、次の「はるばる」が、張ると掛けてあることから、さらに具体

的に明らかになる。さらに「つま」は衣の褸と愛しい妻、「からころも」は、褸に特徴のある衣服だった。前身頃が左右に返されると裏が表に出る。衣の褸が直接表に出て、目立つことになる。「し」と強調されて、「からころも」特有の縁語となり、愛しい妻の存在もはっきりと浮かび上がって来る。「はるばる」は、衣を張ると遠くやって来た意の副詞との掛詞で、この表現から、「からころも」が糊付けしてあったこともわかる。妻が糊付けして張ってくれて強^{こわ}かった衣も旅を経て来ると萎えてしまう。それを着ていると、ほんとははるばる来たものだという旅の感懐が、別れた妻へのいとしさ、なつかしさの情を伴って身内からこみ上げてくる。そんな旅情が、「からころも」と、それによって導き出される縁語、掛詞によって身体的に表現された名歌といえよう。

この後の六首は、恋の部に入っており、先にも述べたように「からころも」が恋衣であることを物語っている。残りは雑歌二首である。

③からころもひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人ぞこひしき (515)

④君こふる涙しなくば唐衣むねのあたりは色もえなまし (572)

⑤あひ見ぬもろきもわか身のから衣思ひしらずもとくるひもかな

③は「ひもゆふぐれ」が、紐結ぶと日も夕暮れを掛けており。ここで初めて「からころも」から紐が導き出されている。紐は、⑤でもみられ、『後撰集』の⁹⁴⁸₉₄₉ 番歌に「からころもしたゆふひもの」とあるところから、それが下紐であったこともわかる。紐が衣に付いているのは、胡風の衣の特徴であった。そして、③の歌では、「返す返す」と衣を返すことと強調の副詞返す返すの掛詞となっているのも、「からころも」が前身柄がうち返された表現であり、④は胸の真中辺が開いている「からころも」の特性に着目して「むねのあたり」といったものであろう。

⑥いつはりの涙なりせばからころもしのびに袖はしほらざらまし (576)

⑦うれしきをなににつつまむからころもたもとゆたかにたてといはましを (865)

⑥で、袖が、⑦は雑歌であるが袂が登場する。特に⑦の歌では、「たもとゆた

かに」と表現してある。「からころも」が袂の豊かな唐風の衣とする説はこの歌から出たものと思われるが、よく読むとこの歌は、「たてといはましを」と述べており、いまだ袖は狭かったことがわかる。裁とうと思えば広袖に裁つこともできたということは、この当時、筒袖から大袖への過渡期であったことを物語るものではなからうか。『万葉集』における「からころも」に袖があったかどうかはわからない。『古今集』において、袖が出てくるが、服飾史は、奈良朝の唐風上下衣時代から、平安朝の大袖中心時代となっており、袖だけが改良されて、大袖の「からころも」となりつつあったのであろう。『古今集』の読み人知らず時代が、その過渡期だったといえよう。

⑧しきしまのやまとにはあらぬからころもころもへすしてあふよしもかな
(697)

⑨からかころもなれは身にこそまつはれめかけてのみやはこひむと思ひし
(786)

⑧は先にも触れたが、大和と外国の意の韓を対比させ、「ころも」から同音の「頃も」を導き出し、「あふよしもがな」で、前身頃が合うこともないと逢うこともないの万葉以来の表現を用いている。先にも貫之の歌があったが、貫之は、勅撰集選入歌だけでも『後撰集』に一首（⁶⁶¹/₆₆₀）、『拾遺集』に二首（149・378）、『新古今集』に三首（284・482・¹⁶⁸³/₁₆₈₁と「からころも」を用いた歌がとられており、「からころも」という歌語が持つあらゆる表現の可能性を試みているようである。それとともに、より技巧的となり、少し「からころも」の特徴が希薄になっているかと思わせる。⑨は、「からころも」を着用して馴れれば、萎えて身に纏りつくようになるものであることが比喩的に用いてあり、衣桁に掛けてだけ恋そうとは思わなかったの歌意となる。この後、「かける」が衣桁に掛けると思いをかけるの掛詞を伴って出てくるが、これも、恋の道行の衣となり、旅衣であれば、外套であり、屋内にいる時は、衣桁に掛けておくことが多かった故に導き出された「からころも」特有の縁語だったと考えられる。

次の雑歌は、先の『万葉集』②の「からころもたつた山」の表現をさらにこ

なして一首中に詠み込んでいる。

⑩たがみそぎゆふつけ鳥かからころもたつたの山にをりはへてなく (995)
ここでは、すっかり枕詞となっているようであるが、「からころも」が男性の着用する夜の恋の道行の衣であるイメージは一首に反映されており、詞書からもわかるように、「からころも」を着て龍田山を越えて河内の国に通って行く夫を悲しんで嘆く、余所の夕暮れの歌と解することができよう。

次の『後撰集』における褻の歌の世界においては、「からころも」が二十首も詠まれている。ここでは、万葉以来「からころも」が秋の季節感を表す伝統を受けて秋の部に四首入り、特に注目すべきは、恋衣としての「からころも」が恋の部の十四首と雑の部の二首、あわせて十六首も占め、中でも

終夜ぬれてわびつるからころも相坂山にみちまどひして (⁶²²/₆₂₃)
などの表現から、まさしく妻問いをする折の道行の衣であったことが明白となる。旅衣としても、離別羈旅の部の四首の中の一首に「いとせめてこひしきたびのからころも」 (¹³¹⁶/₁₃₁₇) と明言してあり、いよいよ「からころも」が旅の衣であったことも確かとなる。

これ以後も、以上の「からころも」の歌語の伝統を逸脱することはないようであるが、『宇津保物語』(五例)では、実物を伴っているとはみられず、『源氏物語』においては、七例とも古風な末摘花の歌に使われ、一例はそれに辟易して揶揄する文に登場する。『後拾遺集』(五首)、『金葉集』(四首)、と次第に細り、『詞花集』では一首もみられなくなる。『千載集』(六首)と『新古今集』(七首)で復活したが、特に『新古今集』では貫之の歌が三首もあり、先にも引用した『栄華物語』所載の二首は平安中期の歌である。新古今時代には、歌語としての学習期に入っていたといえよう。「からころも」の実態も専門の知識となって来たのではなかろうか。しかし、いずれも何らかの点で、「からころも」そのものに根ざした表現を導き出しており、単に衣を導き出す歌語として使われてはいないのである。

おわりに

以上のように、本稿においては、「からころも」の実態を探るとともに、その表現性を解明してきた。その結果、「からころも」の「から」は、「韓」であり、その時代性から一時代前の朝鮮半島を意味し、服飾史でいうと北方胡服系の衣となること。短衣で前身頃が深く重ならないのが胡風の衣服の基本的形態であったが、「からころも」は、それら一般を指すものでなく、その後の時代に有用性故に残った特徴のある特定すべき衣の呼称であった。つまり、「からころも」は、胡風で、前身頃が左右に返されて前開きの、秋に縫われる袷の衣で、恋の衣、旅の衣となる外套だったのである。時代とともに袖などが変化したが、長く愛用された衣服で、それは季節感もあり、表現性も豊かで、五音で声調も良く、歌語として定着した。そのような「からころも」の実態を踏えて一首を再び解釈すると、今まで単なる技巧とだけ捉えられていた枕詞や序詞、そこから導き出される縁語、掛詞が、にわかに生々と水々しく具体的イメージを伴って浮上して来る。実物は、「狩衣」の登場とともに、とって代られ、歌語としてのみ生き長らえるが、「からころも」は、実用であろうが、知識としてであろうが、その実際に根ざして生きたレトリックとして用いられていることが明らかである。歌語として学習され、歌の知識となるのは、早くとも平安中期以後といえようか。その知識さえ失われる時、歌語「からころも」も表現の生命を失い、消えて行くこととなるのである。

なお、奈良朝においても一時代前の男装であった「からころも」は、平安朝の女装「唐衣^{からぎぬ}」と似通うところがあるが、その相違と共通性については、今後の研究課題としたいと思う。

- ① 以下辞書類、単行本の刊行年月日、出版社名は、紙数の関係上省略した。
- ② 窪田空穂『万葉集評釈』、武田祐吉『万葉集全注釈』、土屋文明『万葉集私注』、沢潟久考『万葉集注釈』、日本古典全書、日本古典文学大系、日本古典文学全集、旺文社文庫、日本古典文学集成。
- ③ 金子元臣『古今和歌集評釈』、窪田空穂『古今和歌集評釈』、松田武夫『新釈古今和歌集』、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』、日本古典全書、日本古典文学大系、日本古典文学全集、日本古典文

学集成、新日本古典文学大系。

- ④ 『風俗研究』23、25号、大正11年4月・6月刊。
- ⑤ 『跡見学園女子大学国文学詳報』第12号、昭和59年3月刊。
- ⑥ 以下歌の本文と歌番号は、すべて『新編国歌大観』に依った。『古今集』以下の「からころも」の用字のみ、仮名書きに改めて用いた。
- ⑦ 『万葉』第4号、昭和27年7月刊
- ⑧ 実物図は、図①②は『韓国服飾文化史』、図③④は、筑摩書房『日本文化史』、図⑤⑥は、『国宝 飛鳥高松塚』、図⑦⑧は、『中国歴代服飾』所載のものを使用した。
- ⑨ 久曾神昇編『古今和歌集綜覧』参照。
- ⑩ 『唐代の服飾』東洋文庫、昭和45年3月刊。

討議要旨

座長より「古服についてのイメージが生きているとの事であったが、その場合一種のエキゾチズムの様なものが、当時つきまとっていたと言えるか」との質問があり、発表者は「業平の歌には、エキゾチズムと共に尚古主義（古い物を再びよき物として甦らす）という傾向があったのではないかと答えられた。国文学研究資料館の松野陽一氏より砧とから衣のかかわりについて質問が出された。発表者は「砧とから衣の関係を最初に詠んだのは、貫之と思われる。その歌には、秋になり砧を打ち、衣を自分の妻に縫わせて着せるという生活習慣を反映しているのではないかと考えている」と答えられた。

北海道教育大学の湯沼誠二氏が「＜から＞の漢字表記、＜韓＞と＜唐＞の二つがどうして受け容られて書かれていたのか、特に『古今集』では＜唐＞になっているが、その辺りはどうか」と質問された。発表者は「『古今集』に唐風のイメージを反映している＜唐錦立田の山も今よりは紅葉ながらも時はなるなむ＞がある。いわゆる＜錦を裁つ＞という表現が、『古今集』あたりから出始め、それと表現が似かよっているので、『からころも』そのものの実態がわからなくなった後世の校注者たちが、『古今集』の時代は唐の時代と重なる、唐錦も登場するなどといったこともあり、＜から＞に＜唐＞を当てる慣習が生まれたのではないか。」と答えられた。